

北原白秋と鈴木三重吉の十八年

Eighteen Years Relationship between Kitahara Hakushu and Suzuki Miekiichi

宮 木 孝 子

日本語コミュニケーション学科
非常勤講師

抄録

北原白秋と鈴木三重吉の大正四年から昭和八年に至る十八年間の、書簡を中心に考察する。彼らは既に定説とされている『赤い鳥』の児童芸術運動の中心人物の二人であるが、北原白秋の晩年の『多磨』における短歌論にも影響を与えたこの時期の関係を再考したい。

Summary :

This paper focuses on the 18 years relationship between Hakushu Kitahara and Suzuki Miekiichi from Taisho 4 to Showa 8 from the perspective of their letters. They had already been known as eminent members of "Akai Tori"s juvenile art movement, but this period is noticeable for the Theory of "Tanka", especially in "Tama" written by Hakushu in his later years.

キーワード：童謡、児童詩、新民謡、文学観、国詩

Keywords : children's song, Children's poem, new folk song.

Literary view, the poems of country

北原白秋と鈴木三重吉との関わりは、既に、藤田圭雄『日本童謡史』（あかね書房 昭和四十六年十月）や根本正義『鈴木三重吉と「赤い鳥」』（鳩の森書房 一九七三年一月）などの先行文献や、その後刊行された多くの児童文学の近代童謡研究の中で明らかにされているといってよい。そして、それは、北原白秋が発表した数々の白秋童謡の研究が中心である。ただ、北原白秋の詩業を追って来たものとしては、白秋がこの鈴木三重吉との交流の中で、またその主催誌『赤い鳥』で得た〈童謡〉〈児童自由詩〉の選者としての経験

を通じて、彼が、多くの児童を含める投稿者（詩人）から何を吸収したか、というところに関心がもたれるのである。とりわけ、晩年の短唱、短歌の中には『赤い鳥』で白秋が評した秀逸作品との共通する「観照」や「写生」、「感覚」がみられる。これら作品や、後の白秋主宰短歌雑誌『多磨』における「新幽玄体」の形成にも、すくなくならず、影響があったはずだと推測する。さらに『赤い鳥』では、大正七年七月の創刊号から「地方童謡」を公募し、その選にもあたっている。このことは、後の新民謡や白秋童謡の形成に当然大きな益をもたらした。

そして、『赤い鳥』に参画した大正七年一月、白秋は、『東京日日新聞』（二月一日）において、『國詩』募集の審査委員となる。委員はかつての師である与謝野鉄幹、そして、高浜虚子、齋藤茂吉、島崎藤村の五名で、顧問 森鷗外、幹事 馬場胡蝶となっている。『國語を以てせる新しき詩を募る』とあり、形式は、従来の詩形（短歌等）でも新詩形でも良いというものであった。ここで、白秋は「國詩募集に就いての一言（八）」（同新聞同年一月二十八日）において、ここに募集する日本の新しい詩は、「日本人の血を承け、日本の子守歌を聞き、日本の山水にしたしみ、日本の伝統、教養、風俗、習俗の中に生長し、薫染し来た者である。靈魂及び肉體の本源は日本にある。（中略）彼の如き真純素朴な日本の聲を根底としてこそ初めて新しい私達の小唄となるのである。」と述べており、後の「童謡論」「民謡論」にも現れる『言霊』の発想や風土（郷土）との関係が既にここに現れている。

当時、こうした日本の詩歌観をもった白秋であるから、『赤い鳥』を、その思想的文学的活動の「場」として選び、「童謡」「自由詩（児童詩）」の「選者」としての作品に対した姿勢は、鈴木三重吉とともに、質の高い、児童芸術運動（やがては児童芸術教育）を起すだけでなく、当時の詩壇、歌壇へなんらかの興隆をもたらすことを目標とした行動であったと言えよう。^{註1}

そこで、あらためて白秋の十八年間に及ぶ、鈴木三重吉との交流を雑誌『赤い鳥』参加の意味と、その「尊敬すべくして尊敬し合ひ、争ふべくもなくして争った。」（『赤い鳥』昭和十一年十月「鈴木三重吉追悼號」所収 白秋記「赤い鳥の詩運動（二）」）という結果をもたらした意味を考えたいと思う。本稿では、北原白秋の書簡集（岩波書店一九八八年四月『白秋全集』三十九卷）と、鈴木三重吉の書簡集（岩波書店一九八二年六月『鈴木三重吉全集』六卷・同年七月別巻）を参照しつつ、まずは、覚え書きとして考察を進めたい。

※

さて、『白秋全集』三十九卷の「書簡」には、鈴木三重吉宛の四十一通が収められている。最初のものは、大正三年九月三日「はがき」で、「いつもおなつかしく存じております、印度更紗と地上巡礼と毎月お目かけ度いと存じます、あなたのも何かいたゞかして下さい。左様なら」という短いものである。この年は、九月に雑誌『地上巡礼』を創刊主催し、その白秋のもとに室生犀星、萩原朔太

郎、大手拓次らが集った時期である。その「白金之独楽」に見られる燦爛たる世界と禪的世界「畑の祭」の自然礼賛と民謡ぶりの短唱などをもって、白秋が小笠原の体験を基に、『桐の花』『東京景物詩その他』の都会的的人工的美意識から抜けだし、原初的な生命観と土の臭いのする詩歌を次々に生み出すときでもあった。父島から麻布区坂下町へ移り、俊子との別離はあったものの、まさに白秋は詩壇への復活に大きな期待を抱いていた時期である。白秋から三重吉への積極的な詩友としての近づきを求める内容は、そうした白秋の意気込みが表れている。

一方、『鈴木三重全集』の二冊の中には、北原白秋宛の書簡は見当たらない。鈴木三重吉書簡中に白秋の名前が現れるのは、大正六年十一月十日、在米の協力者小池恭苑書簡で、「(略) 只今、お伽話専門の雑誌を作る計画をして居ます、藤村、鷗外、白秋三氏に頼み、私と四人で毎号書くやうにするつもりです、」とある。三重吉自身は既に大正五年には童話や翻訳お伽話の仕事を始め、大正六年には小宮豊隆宛書簡十月八日付けで、「あるところから兼ねを引き出して、メルヘン専門の抄雑誌(コイツハ人が氣づかぬうちどうかして始めたい)を起こすつもりにして、間もなく着手するはずだったところ(略)」失敗に終わった旨を述べながらもその抱負を語っていた。

白秋は、その前年の大正四年に三重吉宛に八通の書簡を送っており、その中でも初めて会った後の五月二十四日の書簡には、「私とおなじやうな人が一人ゐられたと思へば涙がこぼれます。」とその

出会いの感激を、白秋らしい直情的な素直さで三重吉に伝えている。この頃すでに三重吉は御伽話の専門雑誌を作ることを考え、協力者を探し始めていたはずである。ネオ・ロマンチズムの騎手として名高かった三重吉との出会いは、根っからの浪漫主義者である白秋を大いに勇気付け、親近感をもって文学論議にも意気投合したと思われる。

白秋から近づいたにせよ、白秋と同時期に森鷗外、島崎藤村にも児童の文学的雑誌『赤い鳥』の構想を伝えたという三重吉である。白秋のもつ芸術観・文学観への理解もあったと考えられよう。

その鈴木三重吉が、白秋を詩人としてどのように評価していたかを知る資料として、大正四年六月、雑誌第一期『文章講習録』第九号に掲載された、鈴木三重吉「文章講話」につきのような記述がある。

(万葉集)の歌の音調や感情は、私の文章の情緒といふものに大分或物を與へてゐやしないかと思ふ。古来の手鞠歌とか羽根突唄とかいふような、それから三味線の歌などの多くの古語。これも萬葉に於けると同じく、私の感情と表現と文章の情緒との上にすくなくならぬ誘掖を得てゐる。俳句は私に最短き聯想を提出する方法を教へた。それから私に「自然」なるものに対する詩味をも注入した。これから文章を書く人々は自分で作る必要はないにしても、私の言つた意味で俳句の理解と玩味とに努力を割いても無益ではないと思ふ。又萬葉や俗語について今言つ

たことは、現代の和歌についても言わなければならない。私はこの間亡くなった長塚節氏の和歌や、北原白秋氏の詩や歌や、其他の多くの人々の優れた歌をいつも飲んで読んでゐる。節氏や白秋氏の芸術に対しては、宝玉を護るやうな愛着と、崇高なものも対する敬虔と、音楽に傾聴する歓楽を感じてゐる。(以下略)

右に引用した箇所をみる限りにおいて、三重吉は、白秋の『邪宗門』のころから既に特徴的な「謡ふ」ことを意識した詩歌作品や、その感覚的印象主義的象徴の理解者であったと考えられる。先に引用した白秋の「國歌」と文芸観の底で一脈通ずるものを感じるのには、私だけであろうか。このように、雑誌『赤い鳥』の目指す、児童芸術の文学的価値観は、二人にとって、近しいものとしてあったと考えられる。

『赤い鳥』での白秋の役割を自ら、昭和十一年十月『赤い鳥』鈴木三重吉追悼号(二十卷三号)「赤い鳥の詩運動(二)」の「童謡に就いて」の中で、「赤い鳥の創刊に当たり、私は鈴木君の懇渾を受けて、(略)而して自作の童謡を提供し、募集童謡の唯一の選者として立つた。」とあり、その破格の待遇を次のように述べている。

鈴木君と私の精神的提携は愈々相互の敬愛と信義とによって緊密をまし、また相互に童謡と童謡との間に一線を引いて、敢て他を犯すまじく誓約された。従て童謡(自由詩に於いても)

に於ては全く白秋の意の儘に行爲してよしとされたのである。此の事は一面三重吉の潔癖と理解の貴い証左をなすものであった。十分に感謝された。而してその為に私は児童自由詩に於いても、私の指導を全くし得た。おそらく今後かうした提携者は得られないであろうことを痛感する。

赤い鳥は止むなき事情によつて、昭和四年の三月に休刊し、改めて同六年一月に復活した。復活後、私の作及び選は八年四月まで続いたが、故あつて私の勇退を餘儀なくされた。ここに至つて私の童謡と選童謡は赤い鳥より全く影を没した。白秋去つて以来、他の作家一人をも招聘せず、そのまま空白として遺した三重吉の眞意と例の潔癖とは、むしろ私の感謝となつてゐる。別るべくも別るべき二人では無かつたのである。(以下略)

と、認めている。そして、三重吉の厚遇の成果を(略)自身の詩業の一つとして、此の童謡の道をも開拓し得たことの結縁が実に此の赤い鳥であることを悉く思ふ。」と自らのみならず、現在の詩芸術の一脈として、新童謡の本流の流れを作つた功績者である三重吉をともなる開拓者として読者に伝えている。

※

鈴木三重吉という、最大の理解者とともに歩んだ『赤い鳥』の児

童芸術と自らの新しき詩歌の創造の道であったが、昭和八年四月、双方譲りあえぬまま訣別してしまう出来事が生じる。前項の引用にあった「故あって私の勇退を餘儀なくされた」事件である。その「故」とは、何か。

そのいきさつは、白秋側からは、同年六月、白秋纂一九三三年版『全貌』第壹号（アルス 昭和八年六月）の「一九三三年前半消息」にある。「赤い鳥」との絶縁」と題し、四頁半にわたって経緯が細かく記されている。原因は、「鈴木三重吉とわたくしの性格の相違から来たものと信ずる。忍ぶだけ忍んで来たと思ってるが、どうにもならない感情が前年の夏頃から兆し初めたのも事実である。」とし、鈴木側から「『多忙な君をこれ以上煩わしては濟まないから、今後児童の自由詩は白秋顧問として自分に選ばせてくれ、僕だって詩はわかるよ、募集童謡のやうな尿くさいものは止そうじゃないか。』この根本的の冒険は不用意の失言では決してない事と思ふ。もともと童話と童謡（自由詩を含む）の領域は互に侵犯すべからざるものとして互に尊重しその人を敬愛して、この十六間を提携し来たのであった。赤い鳥の童謡運動は主として誰が中心を成し、その自由詩は誰が提唱し開拓して今日に到ったかは、世の周知の事であらうと思ふ。「赤い鳥」の童謡、ことに自由詩は白秋あつて初めて意義があるのである。他の何人が行つても此の意義は失われてしまう。」と判断、提携断絶の通告をしたとある。そして、それは「尤もこれは人としての絶交の謂ではなかった。」とある。しかし、三重吉側から返答はなく、『赤い鳥』六月号には「今月号から私が

欠かさず自由詩の選をすることにしました。従来の童詩童謡欄は廃止します。」とあり、白秋は啞然、激怒したのだった。

この二人の訣別を、根本正義は、その著『鈴木三重吉と「赤い鳥」』（前出）の中で、この背景を次のように解説している。

童謡欄からは与田準一や巽聖歌等の新人を世に送り、童話欄からは新美南吉という作家が生まれたのである。自由詩が「赤い鳥」の中心なのか、綴方がその中心なのか、という問題もでてくる。童謡の欄からは新人を世に送りだすことによって、新しい風を文壇に吹き付けたのである。こうした仕事は白秋が成し遂げたものであった。また、綴方について考えてみれば、教育界に於ける鈴木三重吉の綴方理論は全国にまで行き渡り、綴方の指導のほとんどが三重吉の考え方に基づいて、各学校では指導されて行つたのである。こうして考えてみると、自由詩が「赤い鳥」の特色なのか、それとも「綴方」が赤い鳥の特色なのだろうかという、この論争は、雑誌「赤い鳥」にとって白秋と三重吉とどちらが重要なのかという論争になる。綴方からは豊田正子が出ている。

「赤い鳥」にとつてはどちらも重要な人物なのである。大正デモクラシーの波に乗じて練り広げられた「赤い鳥の運動」は、それぞれの面で成功しているわけである。（以下略）

そして、「酒の席での口論は日常茶飯事」「後期『赤い鳥』は影の

薄い存在になっていたのであるから、別に問題にすべきものではない。」としている。確かに復刊後の『赤い鳥』は、鈴木三重吉の企画や自ら各地の学校に請われれば出向いて講演を行う等の努力も、その購読数の復活には、難しい状態が続いていた。

鈴木三重吉側も、昭和八年七月二十日付の永島信吉宛書簡で、

北原君は「全貌」に何かくたくだ書いてあるさうです。門下のものたちさへも、ヨセばい、のにと言つてゐるさうです。あの人は自己反省がなく、人のことばかりわるくいふのが癖です。僕は黙ってあいてにしません。よく自由詩の選をスツポカすので自由詩だけは私がやる、すつぽかされたとき、一日一夜に二十頁もつぶすだけの童話をかくのはつらい、童詩童謡だけやれといったのがもとで、全部やめるといふからやめて貰つたのみです。北原君はウヌボレがつよく、自由詩や童謡を辞めると赤い鳥の読者は半減する、そして赤い鳥が倒れる位におもつてゐるのです。一寸も減じません。(略)

赤い鳥が穢れるので何もかきません。又今日まで盡してくれた北原君のことを、悪くなぞ言へませんもの。(略)

と述べている。白秋は、『全貌』のこの事件を記した中に、私が『赤い鳥』を休んだのは二回だけだ、と述べているが、実際は、白秋の原稿入稿はいつもかなり遅く、三重吉をはらはらさせていた。^{註4}ただ、この二人の訣別は、根本正義の指摘するような、『赤い鳥』

という小さな組織の内輪もめでは決してない。確かに、『赤い鳥』の果たす歴史的な役割は終えた時期でもあった。そして、白秋本人が認めるように「性格の相違」から起きた問題とも言えよう。しかし、この訣別は、二人が歩んだ当初、同質と見えていた児童芸術運動の方向性が変化し、相容れない文学観や児童観、特に、『赤い鳥』が児童教育との関係を重視し始めてからの白秋と三重吉の『赤い鳥』への価値観の相違が、必然的な結果をよんだのではないだろうか。

この点は、大正期から昭和にかけての児童芸術と児童教育の流れと変化を重ねて、白秋、三重吉両者の活動を検証する必要がある。

次に、大正七年『赤い鳥』創刊から昭和八年四月の訣別までのそれぞれの歩みの中から見えてくる相違点を、『赤い鳥』と書簡集から拾つてゆきたい。その前提として、訣別の理由にもあげられた、白秋の「選者」としての姿勢を『赤い鳥』から、その童謡観が形成される段階が覗かれる箇所を引用しよう。

○大正八年三月号「通信」童謡選評として

童謡の作者は子供時代の純生な感情や感覚をいつまでも忘れな
いでられる人でなければなりません。(略)もとく童謡とい
うそのものが、子供の感情から自然にされて出た言葉なり謡な
りですから、ただ詩らしく作り過ぎてはいけません。全然
子供になつてしまふことが必要です。(以下略)

と、「童心童謡」の必要性を説いている。

○大正十年二月号「通信」「募集童謡について」

今日も相變らず總じて子供たちの成績がづばねけてゐます。子供たちの五百通以上の作品を二十か三十選ぶのは實に氣の毒で、すくなくとも二百通以上没にするには惜しい位です。

○大正十年十二月号「通信」の「募集詩について」

前に申しあげたいことは、前月から童謡を自由詩としてゐますが、これは童謡の方が少ないので仕方なしに區別しないで、自由詩の名の下に集めてしまいひました。實をいふと童謡は童謡、自由詩は自由詩と區別して別々に掲載したいのです。この區別は、童謡は大人が子どもの心で、またはそのために歌つたのと子供のとあります。つまり児童の民謡なのです。謡ひものです。児童の自由詩は、大人の詩人たちが現在大人の言葉を使って作つてゐる自由詩の行き方と同じく、子供が子供の言葉で作つた自由詩なのです。民謡とは區別しておきたいのです。で、来月あたりから二つに分けます。(略)

童謡は調子を、とにかく俚謡としてとのへねばなりません。詩の法は主としてリズム本位のもので、静かに歌ふとか味ふといふ方がだいじです。

そして、「童謡はおおぎっぱ」でもできるが、詩は「もつと細かくリズムが動いて行」って「もつと自由だ」と説明している。例として、童謡味の勝つたものは、「こどもがちやうちん / つけたっけ、 / 私もちやうちん / つけたっけ」で、繰り返しの同

じ言葉がリズムとなるもので、本来の自由詩としては、「母さん / 風が吹くといふのは / 木がいごくの。」といった子供の感情と感覚で捉えた自然觀照の生きた作品を挙げている。

大正十二年九月、関東大震災までは『赤い鳥』の「童謡」「自由詩(児童自由詩を含む)」の白秋選考欄は多少の増減はあつたが盛況であつた。しかし、その後、とりわけ昭和六年の復刊後は、白秋の意気込みとは相反して投稿者が減少してゆく。それは三重吉の「綴り方」も同じ傾向を示した。つまり、『赤い鳥』の存在自体が低迷していったのだ。

福井研介の「大正期の思想と文化―『赤い鳥』を中心として―」(小峰書店一九八三年七月赤い鳥の会編『赤い鳥』と鈴木三重吉所収)の「十二 大衆文化の成長」では、大正期の大衆文化の特徴として、「商品化された、大衆性をもち、『中立性』を掲げて」のもので、そうした文化が大衆の生活に意識に入り、結果として大人では雑誌文化を代表する『キング』(一九二五年創刊)が生まれる。

それらの作品は「ふるい伝統的社会的モラル(義理人情、勸善懲惡。忠孝)が新しい装いで語られる」ものであつたと指摘する。そして童謡雑誌も減少し、少年少女雑誌にとって換わるられる。童謡童謡もそれらに組み込まれるが、そこには、かつての童謡童謡が「目指していた西欧風なロマンティズム、リベラリズム、ヒューマニズムの思想に根ざした家父長制的な『いえ』や国家への反逆としたものでなく、反対に伝統社会的モラルへ順応するための手段として」変質してゆくところがある。それは、まさに『赤い鳥』の目指した自由で、

高尚な精神を宿した児童芸術・教育運動への時代からの大きな逆風であった。関東大震災以降、日本は徐々に思想的にも閉塞感を増してゆく、表面的な摩登な流行の影に時代の変化は迫っていた。果たして、復刊後の変化は大きいものがあつた。

○昭和六年三月号「講話通信」の「童謡と自由詩について」

童謡は今月もまだ特選級の作品が見当たりません。甚ださびしいことです。(略) それに讀者の方でも休刊前の「赤い鳥」や、自由詩の發達の過程を知らない向きも見受けれます。たとへばなぜに児童たちの童謡(歌謡調)をも募らないかといふとき質問をよこされるのです。さうなると児童自由詩とは何ぞやといふ根本義から説かねばならなくなります。これについては私の著書「緑の触覚」或は白秋全集中の第十八巻、「童謡論集」を御覧下さるといいと思ひます。この「赤い鳥」では、児童たちには自由詩をこそ指導すれ、歌謡調のものは排してをります。すべてが自由詩の精神に立つてゐるのでこのころはよくおふくみ置き下さい。

○昭和七年一月号「講話通信」の「童謡と自由詩について」

童謡は稍停滞のかたちである。(略) 一時代前に優秀な作者が排出したこの「赤い鳥」の童謡欄を思ふと、今はあまりにさびしい。どうにか盛りかへしたいものだ。

○昭和七年二月号「講話通信」の「童謡と自由詩について」

童謡はまるで氣勢があがらない。こうした墮力行から思ひきつて立て直つて頂たいと思ふ。もつと眞形式を創造する勇氣と童心の守持を潔くしてほしいと思ふ。

○昭和七年三月号「講話通信」の「童謡と自由詩について」

石川さんの、「朝」では昨日の雨で庭の土が紫色だといふのはよく寫生してゐる。この土の色を紫をわたくしもよく歌にしたものだ。児童の自然觀照もこゝまで新しくなつたと思ふと愉快である。

昭和六年七年と復刊後の白秋が、特選と評価する作品は、「寫生」「自然觀照」が際立っている、といった言葉が散見される。

(参考) 朝 (特選) 東京府下本田第一小学校尋六 石川 智恵子
すみきつた深い空、／うすら寒いが気持ちのよい朝だ。／昨日の雨で、／庭の土が紫色だ。／すみにある黄色い菊、／ほのかにほつて来る。(昭和七年三月号白秋評の作品)

こうした通信欄からは、大正十年からの「自由詩(児童自由詩)」の盛り上がりや、後に白秋の童謡論として書かれる、童謡と自由詩の白秋の区別や認識の形成がみえる。復刊後は、昭和の五年の大恐慌の経済不況と大衆的な児童雑誌や少年少女雑誌の氾濫が「赤い鳥」に打撃を与えた影響も投稿作品の評価によく現れている。そして、また児童への詩評の中には、昭和の白秋が《閑寂境》の形成後も短

歌において究めて止まない「写生」「自然観照」の語がみえるのは注目される。

こうした、『赤い鳥』の童謡欄・自由詩欄の場を得たことが、白秋詩歌、歌謡に及ぼした影響はやはり大きかったといえよう。本稿は管見にすぎない試みだが、白秋は『赤い鳥』において、新童謡新民謡を形成し、世の広める役割を果たしたばかりで無く、多くの子どもたち、若者たちの投稿作品からも、白秋は言葉を、詩を、学んでいったと考えられる。

その間に、大正十一年、白秋は唯一人の信頼した作曲家、山田耕作と『詩と音楽』(アルス大正十一年九月)を創刊する。その出会

いをもたらしただのもまた、鈴木三重吉であった。^{註5}『詩と音楽』創刊号に掲載され、後に『芸術の圓光』としてまとめられる文章の中には、

お、この日本の言葉について感謝しよう。私たちのこの日本の言葉、言霊の幸ふ國のこの言葉、まさに掌を合わせて禮拜すべきこの言葉。

(略)

日本の言葉を以て日本の詩を。——眞の日本民族への、郷土への郷愁を持つならば、眞に日本を愛し、また我自身を愛すならば。

といった「言霊」「日本民族」といった意識での詩歌創造が語ら

れる。これは、大正七年一月に白秋が『東京日日新聞』紙上でのべた「國歌」の理想が詩人白秋の中で具現化されていった喜びと高揚感が書かせたものであるうか。やがて、混乱する詩壇の危機意識の中、昭和七年の雑誌『短歌民族』刊行、さらに、昭和八年雑誌『全貌』の刊行へと白秋の短歌への傾斜が深まる予兆としても興味深いところである。この道筋については、別稿をもって考察したい。

※

それでは、前項で述べた白秋の歩みをおさえながら、大正七年七月以降、昭和八年までの、北原白秋と鈴木三重吉の『赤い鳥』という芸術共同体としての二人の問題と、それぞれの『赤い鳥』における文学的芸術的方向性を特色が窺える書簡を取り上げて行きたい。

1. 「赤い鳥」の短歌と童謡の作曲とその周辺

大正九年一月二十三日付、鈴木三重吉宛白秋書簡は、三重吉より、短歌を「子供の歌」としてつくらせてはどうか、そして、童謡に作曲を、との提案があったその返信である。

白秋は「三十一文字の在来の歌」をつくらせるのは考えて直してほしいと述べている。白秋から見ると「害あって益はない」という。

「万葉時代にできたその時代の美意識にはふさわしいが、」新しい文学運動を起こす今、時代と言葉が重ならない。「で、今日の言葉ではどうもぴつたりとしません。」「私が歌を止めたのもそうした

理由があります。「子供に自由な発想をさまたげるばかりでなく、帰って生命のない、子供らしくないものになる」「子供は子供のリズムで歌ってほしい」「自由画、自由な綴り方自由な童謡」を奨励しつつ、形式にとらわれた短歌を児童に奨めるのはおかしい。そして、「新しい短唱を始めたい」と述べている。

また、童謡を作曲することも「誰の作曲も関心しません。」「本当に日本的でなければなるまいと思います。然し西条君其の他のは作曲しないと子供には面白くうたへないでせう。」「今の音楽家は案外日本人としての日本の童謡の真生命を知ってゐないやうな気がします。」「山田耕作君の『とんとんころりこ』丈はほんものです。」そして、欄外に作曲に適する童謡とそうでないものがあると注意を促している。

この問題は、大正九年十月号『赤い鳥』『通信』に「少年少女と和歌」において波多野次郎という人物の『赤い鳥』に歌壇を設けてはどうか、という提案によって再び、白秋の前にもたらされるが、三重吉に答えた、ほぼ同じ主旨で反対をする。「第一、なるたけ子供には自然に必要な以外の、文学的方向への努力は強いたく」ない「子供は子供に自由なリズムがあります。そのリズムに従って自由に謡はせたいものです。五七五七七で何でも片着けるさせるは壓制です。」そして、「本当の心持の自由が自由自在に表れる」のは「童謡」であり、自分の詩にたいする姿勢でもあると述べている。この時代の白秋が短歌の形式に不自由さを感じ、新しい詩形式を模索している様子が感じられ興味深い。

大正九年、北米から帰国した山田耕作は、鈴木三重吉を介して、白秋を知る。それは白秋にとってもまた、大正十一年九月の芸術誌『詩と音楽』への第一歩であったことは前項でも触れた。

音楽に関しては、鈴木三重吉も、大正八年八月二十二の小池恭宛書簡では、既に「赤い鳥の童謡は人が一寸い／＼うたひます今度蓄音機へ吹き込ませ流布させる考へです。」とあり、また、成田為三をドイツに留学させ、作曲家として育て新しいメディアを意識した『赤い鳥』の展開と啓蒙を考えていた。

白秋は山田耕作という言語芸術の理解者を、日本語にたいして自分と同じ感覚の持ち主として敬愛する。耕作の「一語一音節」の歌曲の作法は日本語の音韻の特徴を際立たせる試みであった。この更なる理解者を得て、童謡、民謡とその創作の幅を広げて行く白秋だが、それとともに、『赤い鳥』への童謡がなかなか、予定通りに入稿できなくなることも増え、『詩と音楽』の創刊された大正十一年九月、十二月には三重吉宛 書簡に童謡の遅れをわびる書簡を出している。特に同年十二月十二日の三重吉宛書簡には、「兄位くらい私をほんとに知ってくれる人は世の中にあると思はない。ことに芸術といふものに対して敬虔な兄のお気持ちは涙ぐましいほど有り難いと思います。芸術家の中でも芸術をなおざりにする現代に兄のごとき隣国の王様を持つ事は私の矜りです。」とまで述べて三重吉に謝意を表している。三重吉も関係していた雑誌『女性』には童謡が出せたことが書いてあるが、『詩と音楽』に五十首の歌を書いた

だが、「大切の^{ママ}赤い鳥」の童謡が出来ないので弱りました。」と続けている。その上で、童謡が流行して母校でもやっているが、西條八十や野口雨情の作品ばかりで、白秋の作品を一つも知らないという、そこで、母校から「開発したい」ので、「赤い鳥童謡の今まで出た分を一冊づつ揃へて、改めてただかしてほしいと思ひます」「それから私が著名して母校の私の文庫に」送るとある。白秋の氣質が良く現れている書簡である。

実際、白秋は『赤い鳥』の童謡については、遅くならざる得なかったであろう。白秋の「童心童謡」の童謡は、真に自然と沸き上がる感興を入れねばならず、苦しいものであったに違いない。また、大正十二年には、六月に詩集『水墨集』をアルスから刊行し、短歌においても、〈閑寂境〉という新たな境地を開拓し、詩壇の論争やモダニズムの波に影響を受けながらも、白秋の詩歌が充実して行く時期でもあった。更に、詩壇では、既に民衆詩派との対立、民謡を巡る論争、詩話会の問題も紛糾しつつある最中である。『赤い鳥』を自分の芸術の基点に置きながらも、白秋の作品世界は、既に、詩、短歌、民謡、新民謡、童謡、児童自由詩へと広がり、決して収斂することはなかった。

つまり、白秋は、活動の場が増え広がるほど、『赤い鳥』には童謡の創始者としての責任感と意欲はあっても、原稿量の増加や詩壇の人間関係の複雑化が重なり、三重吉への負担と苦勞を知ってはいなくても、原稿を入稿することが年々困難になっていったと考えられ

る。しかし、その「場所」は自分の「場所」として揺るぎないものと確信していたに違いない、それは三重吉への甘えであり、白秋流の信頼でもあった。

2. 鈴木三重吉の児童演劇構想

鈴木三重吉全集の書簡集で大正末期を見て行くとき、興味深い児童演劇にたいする三重吉の構想をみる事ができる。順番に並べてみよう。

① 大正十年 四月一日 小宮豊隆宛書簡

「今日は有楽座へ童話劇を見に行つた。プリキ細工の玩具のごとき芝居なり。」

② 同年 十一月三日 小宮豊隆宛書簡

「例の童話劇を、ともかく三十三編選出した。この中、附議に値するものは、セイゼイ五六編のみ。それで、この前会合した五人〈貴兄、菊池、楠山、久保田、僕〉で集会、輪読して、一挙に議決したいと思ふ。力明後日5日〈土曜日〉午後3時に、築地の喜多野家へご足勞願いたい。略」

③ 大正十一年 四月九日 小宮豊隆宛書簡

「豊隆閣下。一つ童話劇のいいものを、われわれの指揮下にやりたいね。最近ライオン齒磨の「児童齒科院」が子供デーを催したい

と申し、プログラムを作つて相談に來た。(略)僕は、脚本はオレの方で提出しオレタチが監督してやるから、純藝術的な童話劇を二つ、上演しろとす、めてやった。(略)帝劇の山本にオレが相談したら、帝劇の方は四、五月つかえる、有楽座ならばよし、帝劇の興行として上演してもよし、その代わりライオンがやり、ライオンデーとでも何とでもして広告に使つてよいということになる。(略)僕の考えでは俳優は全部、帝劇の學校の生徒を使ひ、すれからした一人前の女優だの、車屋のごとき下廻りは排除して、全部小さな生徒でやりたいつもりである。」

④ 大正十四年 一月十二日 加計雅文宛書簡

「今度、本を復刊するのを機会に 音楽生徒の練習場も入り用なので、独立した家を一軒借りたいと思つてもいます。その電話購入費二千元、敷金千円、設備五百円で合計三千五百円を一度に貸していただきます。これは一カ年貸して下されば、次の音楽会の利益で、月額三百五十円づつ、十ヶ月で返します。」

ドイツ留学から帰つた成田為三が入社。毎月三四カ所で音楽会を興行して、赤い鳥の宣伝がてら日本中を巡る時に、小学校卒の少女を五名募集して、六ヶ月の間音楽を学ばせ興行に伴い、童謡を歌い、簡単な子供劇を上演するとある。この計画は、続いてだんだん団員を増やし少女二〇名、少年一〇名の高等な小劇団を結成するとある。

さらに、その児童劇団構想は大きくまた具体化し、一月二十三日

の加計宛書簡では、「千圓」の借金の依頼と、返済方法、そして劇団構想に必要な土地が手に入る可能性があること、「現在やっている児童劇団は、俗悪きわまるものなので、(大阪の賓塚方式)一つ高尚な歌劇と児童劇団を作るため、附属の學校を設け、三千人以上を入れる、東京第一の劇場を建築する計画を建てています。」「赤い鳥児童劇學校、赤い鳥歌劇學校、赤い鳥劇場といふ名前で成立することになるでせう。喜んで下さい。私の久しいく夢が實現するのです。そこでの劇の寫眞を赤い鳥の口繪に十頁も入れさせなぞして、雑誌の方も賣れるやうにします。又、同園の附属として紳士淑女のための乗馬學校をつくり、童話劇、歌劇の女生徒も乗せて、いろくの競技なぞさせ、それを入園者に參觀させる」とある。

⑤ 同年 四月二十七日付 小宮豊隆宛書簡

「學校の生徒募集で寸閑なく、ご挨拶を遠因した。(略)三越が経費節約のため、二十五六名のバンド(少年音楽隊)を竊かに賣りも出してゐる。これをそっくり私の學校へ取ることにする。」

こうした三重吉の奮闘も虚しく、同年 五月三十日付 小池恭宛書簡には、結果として、この音楽劇・児童劇學校構想は、出資者が不景気のおおりで資金難となり、困難となる。ただ、三重吉の子息鈴木珊吉の「父と『赤い鳥』のことなど」(小峰書房一九八三年七月 赤い鳥の会編『赤い鳥』と鈴木三重吉)には、昭和三年の頃の記述で「そのころ父は少年少女歌劇團を設立し、『赤い鳥』の作

曲家成田為三氏指導のもとに、鶴見の花月園の小劇場などで児童歌劇を上演させた。」とあり、規模は縮小したものの、赤い鳥の児童歌劇を実現している。

富田博之『日本児童演劇史』（東京書籍昭和五十一年八月）の「第三章 芸術教育運動と『童話劇』一、雑誌『赤い鳥』の創刊と『童話劇』」によれば、この三重吉の児童演劇構想のもと、『赤い鳥』の誌面には、総計四十四編の作品が掲載され、連載になった物を入れると、その二倍に達する数が発表されたとある。また、作家も半数の二十三編が久保田万太郎、五編を鈴木三重吉、四編を楠山正雄、三編を小山内薫、二編を長田秀雄、そして、秋田雨雀、松井松葉、水木京太が各一編ずつとなっている皆一流の、近代戯曲の作者たちである。また、富田によれば、児童劇の作品を、「こどもが演ずる為の作品」と「おとなが演じて子供に見せる為の作品」とに分けて考える必要があり、「赤い鳥」では、『子供に見せる児童劇』を多数、載せたことは、「我が国の児童演劇の戯曲の出発点ともなった」と高く評価している。実際、『赤い鳥』に掲載された戯曲を上演した際の写真や報告が読者投稿欄に寄せられている。

ところが、鈴木三重吉の夢描いた児童劇や児童のための音楽劇に対する、北原白秋の言葉は見当たらない。ただ、大正十一年四月号『赤い鳥』『通信』『募集童謡について』の中で、「それから長い童謡劇を寄せた人もありますが、今では載せるに困ります。よほどいいのでなければ鈴木さんに言えません。」との苦言があり、この時

代の児童演劇熱が想像される。白秋は山田耕作とともに日本歌曲として、童謡詩の名作を数多く残してゆくが、昭和八年の「童謡と児童自由詩について」（昭和八年七月『コードモノクニ』）にもみられる、レコード童謡への嫌悪、流行歌曲的童謡への断固たる姿勢から、児童演劇の低俗化への懸念もあり、なればこそ、子ども達に高尚な芸術としての児童演劇を『赤い鳥』の芸術教育運動にいれようとした三重吉の構想への理解があってもよさそうなものだが、見つけることはできなかった。

三重吉の児童教育的発想もある児童演劇に、当時の成功例として宝塚少女歌劇の音楽学校の生徒育成法などを手本にするところなど、当時の児童文化の広がりとそのなかで、『赤い鳥』の芸術的表現の場を時代に即した形で広げようとしたことは鈴木三重吉が単なる理想主義者ではないことを示す一例でもある。『赤い鳥』をもって児童芸術をどこまでも牽引しようとした三重吉の気迫が見られる。事実、大正十年『赤い鳥』では、中山太陽堂文具の支援で「童話脚本懸賞募集―日本で始めての試み―」の大々的広告をうち、翌年『赤い鳥』一月号から六月号にかけてその入賞戯曲を掲載した。一位七百元、二位五百円、三位一等三百円、三位の二等二百円、当該佳作二点、それぞれ五十円の賞金とプラトン万年筆が一本付く豪華なものであった。選考委員も小山内薫を始め、久保田万太郎、菊池寛、楠山正雄、秋田雨雀など錚錚たるもので、鈴木三重吉自身も入っていた。この『赤い鳥』児童演劇の戯曲の特色はまた、稿をあらためて考察したい。

※

北原白秋の詩業を軸に鈴木三重吉との出会いと訣別の意味をとらえようと、『赤い鳥』創刊前後から、昭和八年の訣別までを、その間の二人の児童芸術に対する姿勢の差異と独自性を考察しようとの本稿の試みであったが、その明確な結論にはなかなか近づけそうもない。しかし、限られた書簡のやりとりを見るだけでも、『赤い鳥』を中心に据えた二人の距離と芸術的方向性の変化はめざましく、遅かれ早かれ、二人の訣別はやって来たに違いない。今回、復刻版『赤い鳥』全巻全号を白秋の詩、童謡及び選考作品を中心に読んでいったが、さらに鈴木三重吉の「綴り方」を視野に入れて、白秋が『赤い鳥』から得たものを探る必要があるだろう。

『赤い鳥』は確かに児童の芸術運動であるが、白秋にとっては、自らの詩業の掛け替えのない考察の場であった可能性は高い、なぜなら白秋は多くの詩歌の雑誌を創刊し、主催したが、『赤い鳥』ほど、長きにわたって係わった詩誌はないのだから。白秋の詩人としての気質を考えれば可能性なきところにとどまることは出来ないはずだ。白秋の『赤い鳥』と過ごした十八年間は長く、その意味は大きい。今後は、新たな視点から、『赤い鳥』を視野に置きつつ、白秋の大正から昭和を再検討し、一度遠ざけた「短歌」に再び帰るべく白秋の詩業の到達点に近づきたく思う。

最後に、本稿の題名にした「北原白秋と鈴木三重吉の十八年」に

おける二人の関係は、三重吉への追悼文でもある昭和十一年十月『赤い鳥』所収「赤い鳥の詩運動（一）童謡と児童自由詩」にある白秋の次の言葉がそれをよく表している。

誰が何と云つても、此の痛惜の念は白秋私ほど深甚な者はあるまい。何となれば、赤い鳥は三重吉後半生の象徴シンボルそのものであったと同時に、不肖ながら白秋此の私の分身の映像でもあったからである。

註

註1 白秋の「国歌」に関する論考では、坪井秀人「国語・国詩・国民詩人——北原白秋と萩原朔太郎」（岩波書店一九九八年秋季刊『文学』所収）と同居「近代の詩と歌謡と——その危険な関係」（岩波書店一九九九年春季刊『文学』）がある。

註2 『白秋全集』第三十九卷所収の大正三年の書簡から、訣別した昭和八年までをいう。白秋も『赤い鳥』鈴木三重吉追悼号の「赤い鳥の詩運動」の中で、「永い十七八年」と記している。

註3 本資料は、広島市立中央図書館広島文学資料室所蔵の「鈴木三重吉文庫」所蔵のものである。今年、八月三十一日に、鈴木三重吉と『赤い鳥』関係の資料を調査、閲覧させていただいた。

註4 与田準一「赤い鳥」編集回想（小峰書店一九八三年七月『赤い鳥』と鈴木三重吉所収）には、「編集の小野さんは毎月その原稿催促のために（小田原へ）通い続け、毎月一週間くらいは白秋山荘に寝泊まりしていた」とある。（一）内は筆者記入。

註5 山田耕作『白秋を憶ふ』(初出昭和十八年十一月十日『週間朝日』・岩

波書店二〇〇一年十月『山田耕作全集』3所収)に「詩の好きな私は

鈴木三重吉からこの運動に引つ張られ、彼を介して初めて『邪宗門』

の詩人と識つたのである。」とある。

参考文献一覧

新聞『東京日日新聞』大正七年一月一日火曜日(十二面)・同年一月二十七日
日曜日(四面)・同年四月二十三日火曜日(四面)・同年四月二十四日水曜日

(四面)

雑誌 第一期『文章講習録』第九号(大日本大學会 大正四年六月)

雑誌季刊『民族短歌』一号(アトリエ社昭和七年十一月)

雑誌季刊『民族短歌』季刊二号(アトリエ社昭和八年六月)

雑誌『全貌』第壹号(アルス昭和八年六月)

雑誌『赤い鳥』鈴木三重吉追悼号(第二十卷第三號(赤い鳥社昭和十年十月)

雑誌『赤い鳥』創刊号(終刊)(近代文学館復刻版 赤い鳥社大正七年七月(昭和

和十年十月)

雑誌『詩と音楽』創刊号(久山社復刻版 大正九年九月)

雑誌『詩と音楽』第一卷三号(久山社復刻版 大正九年十一月)

雑誌季刊『文学』(岩波書店一九九八年秋)

雑誌季刊『文学』(岩波書店一九九九年春)

『白秋全集』二十四卷(岩波書店一九八六年十月)・三十三卷(同一九八七年五

月)・三十九卷(同一九八八年四月)・別卷(同一九八八年八月)

『鈴木三重吉全集』六卷(岩波書店一九八二年六月)・別卷(同一九八二年七月)

『山田耕作著作全集』二卷(岩波書店二〇〇一年六月)・三卷(同一二〇〇一年十

月)

根本正義著『鈴木三重吉と「赤い鳥」』(鳩の森書房一九七三年一月)

鳥越 信著『日本児童文学史研究』(風濤社昭和五十二年二月)

富田博之著『日本児童演劇史』(東京書籍昭和五十一年八月)

藤田圭雄著『日本童謡史』(あかね書房昭和四十六年十月)

日本児童文学会編『赤い鳥研究』(小峰書店昭和四十四年四月)

赤い鳥の会と鈴木三重吉編集委員福井研介・水藤春夫・与田準一編著『赤い

鳥』と鈴木三重吉』(小峰書店一九八三年七月)